ゲルツェンとデカブリスト「伝説」

河原祐馬

目次

序
第一章　ゲルツェンとデカブリスト事件
第二章　「一八四八年」革命以後のゲルツェン
第三章　デカブリスト・キャンペーン
　第一節　『北極星』と『コーロコル』
　第二節　デカブリスト・キャンペーンの展開
第四章　デカブリスト「伝説」の創造
　第一節　ゲルツェンのデカブリスト像
　第二節　「伝説」創造の時代的背景
第五章　ゲルツェンと革命主義的デカブリスト評価
　第一節　革命主義的デカブリスト「伝説」
　第二節　レーニンのデカブリスト評価とソ連史学
結語

序

その独創的な「ロシヤ社会主義論」の提唱によって近代ロシヤ政治思想の二大思潮とも言うべき「西欧」主義と「スラブ」主義との思想的架橋の役割を果たしたアレクサンドル・ゲルツェンは、またその精力的な出版活動を通じて一時期祖国ロシヤの革命運動を牽引する代表的な政治運動家としての役割をも果たした人物であった。[1] 彼は亡命先のロンドンに「ロシヤ自由」出版所を創設し、帝政ロシヤ政府の圧制を様々な角度から弾劾することによってロシヤに真の自由をもたらす政治的な潮流を創り上げようとした。

こうしたゲルツェンの出版活動において、一九世紀初頭のアレクサンドル一世時代にロシヤの進歩的な青年貴族たちが中心となって行ったデカブリスト運動は、彼にとって常に注目すべき中心的なテーマの一つであったと言える。一九世紀五〇年代から六〇年代にかけてゲルツェンによってなされたいわゆる「デカブリスト・キャンペーン」の結果、デカブリストたちの名はロシヤ内外に急速に普及していった。彼によってデカブリストたちに与えられたイメージは、一言すれば、祖国を「専制ロシヤ」の圧制から救い出そうと努めた「頭から足の先まで純粋な鋼鉄によって鍛え上げられた」[2] 人々のそれであった。こうしたデカブリストたちのイメージは、まさにその「伝説」的な意義によって、その後のロシヤにおける政治・社会運動の展開に直接・間接の影響を及ぼしていくことになるのである。

本稿では、ゲルツェンによってなされたデカブリスト評価の内容とその性格について考察し、この彼の評価がデカブリスト評価をめぐる研究史との関連において如何なる歴史的な役割を果たすことになったのかということにつ

いて検討していくことにしたい。こうした試みが現在特に重要であると思われるのは、ゲルツェンの描いたデカブリスト像がペレストロイカ以前のソビエト史学における「公式」的なデカブリスト評価と密接に結びついていると考えられるからである。というのも、戦後のわが国のデカブリスト評価にも少なからぬ影響を与えてきたソ連史家たちによる「公式」的なデカブリスト評価において今世紀初頭にレーニンによってなされたデカブリスト評価が極めて大きな役割を果していることは周知の事実であるけれども、[3] このレーニンのデカブリスト評価の「ルーツ」とも言うべきイメージをデカブリストたちに与えた人物こそまさにゲルツェンその人だったのである。それ故に、ゲルツェンによるデカブリスト評価の再検討の試みは、従来のソビエト史学における「公式」的なデカブリスト評価そのものの再検討をも同時に意味する試みであると言えるのである。

第一章　ゲルツェンとデカブリスト事件

一八二五年一二月、サンクト・ペテルブルグおよび南ロシヤにおいて一群の青年士官たちによって指揮された武装蜂起が勃発する。後にデカブリストの乱と呼ばれる事件がそれである。この反乱は当時のロシヤ社会に極めて甚大な影響を及ぼした。反乱が宮廷にほど近い首都の中心に位置する元老院広場で公然と行われたこと、また反乱に参加した士官たちのほとんどが本来ならば皇帝を警護すべき近衛連隊の貴族たちであったという事実は、アレクサンドル一世の突然の死によって半ばパニック状態に陥っていた当時のロシヤ宮廷をその根底から揺るがすものであった。さらに当時ロシヤ政府の要職にあった貴族たちの多くが、反乱鎮圧後に逮捕され、死刑もしくはシベリヤ流刑に処せられた青年士官たちとなんらかの形で姻戚関係にあったという事実は、ロシヤの上流階層全体を巻き込ま

ざるをえない深刻な状況をロシヤ社会に生み出す結果となった[4]のである。

反乱に始まり、政府軍によるその鎮圧を経て、叛徒たちの処刑に終わったこうした一連の事件は、当時十四歳の少年であったゲルツェンに対しても少なからぬ衝撃を与えることになった。このいわゆるデカブリスト・インパクトが彼にとってどれほど大きなものであったかについては、ゲルツェン自身が後に一連の著作において詳細に物語っている。一八五三年に書かれた『過去と思索』の一節においてゲルツェンは当時の状況を次のように回想している。

「騒擾や裁判についての話、モスクワ市中の恐怖はわたしの心につよい衝撃をあたえた。わたしのまえには、あたらしい世界がひらけてきた。それはますますわたしの全精神生活の中心となりつつあった。どうしてそうなったのか、わたしは知らない。事件の本質をあまりよく理解せず、あるいはきわめてぼんやりとしか理解しなかったが、わたしは自分が散弾と勝利、牢獄と鉄鎖のがわの陣営にいるのではないことを感じた。ペステリとその同志たちとの処刑はわたしの心の、子供らしい眠りを最後的にめざめさせた[5]」。

このように、デカブリストの反乱をめぐる一連の事件はゲルツェンの社会意識を目覚めさせる上で決定的な役割を果たしたと言える。そして、こうした社会意識の目覚めは、さらにデカブリストたちの遺志を受け継ぎ、ニコライ一世の専制政府に対して公然と立ち向かっていくことを自らの使命とする明確な意志の表明へと彼を導いていくことになるのである。

ゲルツェンが終生の友となるニコライ・オガリョフと親交を結んだのはちょうどこの時期においてであった。シラーの作品を通じて互いの友情を深めていった二人にとって「『暴君の圧迫から町を解放するために』袖のなかに短剣をかくして行ったメロスの話から、またキュスナハトのせまい小道でフォークトをまちぶせていたウィルヘル

ム・テルの話から—十二月十四日の事件とニコライとの話に移ってゆくことはたやすいことであった[6]。彼らにとって「十二月十四日の叛徒」たちは、シラーの作品で登場する主人公さながらの理想的な自由の闘士たちであった。そして、この自由の闘士であるデカブリストたちの遺志を受け継いでいくことこそ自らに課せられた使命であるという思いが彼らの心をとらえていく。両者によって交わされた「雀ガ丘の誓い」は、この時の彼らがおかれていた心的状態をシンボリックに表現した出来事であった。一八二七年の夏のある晩、ゲルツェンとオガリョフはモスクワ郊外にある雀ガ丘において自らの生涯をデカブリストたちが果たせなかった「崇高な」事業に捧げることを誓い合った。

「息を切らして、真っ赤になって、わたしたちは汗をふきながらそこに立った。太陽は沈みかけ、かなたこなたの円屋根がかがやき、町が山の下にかぎりない広さにひろがっていた。さわやかな風がときどき吹いてきた。わたしたちは立ちどまって、たがいによりかかった。そしていきなり抱き合って、モスクワ全市を目のまえにして、わたしたちの生命を、わたしたちの選んだたたかいのために、捧げることを誓った[7]」。

そして、ゲルツェンはさらに次のように続けることによってこの時の彼らの感情が如何に誠実なものであったかを強調している。

「この光景はあるいはすこぶる不自然な、すこぶる芝居じみたものに見えるかもしれない。だが二十六年たった今日でも、それを思い出すと、わたしはなみだの出るほど感動するのである。それは神聖なほど誠実なものであった[8]」。

この「雀ガ丘の誓い」についてはその存在そのものを疑問視する所説[9]もあるが、その存在の是非は別として、ここで重要なことは当時すでにロンドンに亡命し、「自由ロシヤ」出版所の活動に本格的に着手しはじめていたゲルツェンが自らの少年時代をふりかえって自己の基本的な政治的方向性を決定づける契機となった出来事としてこの

「雀ガ丘の誓い」について回想していることである。フランスのロシヤ史家ミッチェル・カドーは『過去と思索』におけるゲルツェンのこの描写を自己の亡命を正当化するための「ロマンチックなイメージの後追い的な反映」[10]を示すものであると述べているけれども、この『過去と思索』執筆当時のゲルツェンが抱いていたデカブリストたちに対するロマンチックなイメージがそのまま一八五五年以降に本格的に展開されるデカブリスト・キャンペーンにおける彼の評価に如実に反映されていくことになるのである。

以上述べてきたように、デカブリスト事件はゲルツェンの少年時代における最も衝撃的な体験であった。このデカブリスト・インパクトこそ彼が生涯ロシヤの変革運動を志す上での決定的な契機となったのであり、後にロシヤ社会主義論の主張へと結実していく彼の思想形成のまさに原点となっているのである。そして、このようなゲルツェンとデカブリスト運動との密接な関係は、彼をしてデカブリスト・キャンペーンに対して単なる政治的プロパガンダ以上の意味合いを与えさせることになるのである。

第二章　「一八四八年」革命以後のゲルツェン

一八四七年一月三一（一九）日[11]ゲルツェンはモスクワを去ってパリへと向かった。この時、これが祖国ロシヤとの永遠の別れになろうとは彼自身まったく考えてはいなかった。この後、彼は一八七〇年にパリで孤独のうちに息をひきとるまで、フランス、イギリス、スイスをはじめとする西欧諸国において亡命者としての生活を送ることになるのである。

当時、フランスの都パリはゲルツェンをはじめとするロシヤのインテリゲンツィヤたちにとって特別な意味をも

っていた。即ち、パリはひたすら自由を志向する彼らにとって「革命の精神的源泉と映じていた」[12]のである。ゲルツェンは彼がパリに到着した時の思いを次のように回想している。

「当時われわれは……パリという言葉を、一七八九年および九三年の、あの偉大なりし出来事や偉大なりし人々の追憶と、また理想のための、権利のための、人間の尊厳のための、大いなる闘争の数々の追憶とに結びつけることにしていた。……パリという名称は、当時の人間が熱中していたあらゆる高貴な仕事と、堅く結びついていたのである。私は敬虔の念をもってパリに入った。イェルサレムやローマへ入る人たちがそうしたように」[13]。

しかし、フランスに対するゲルツェンのこうした思いはけっして長くは続かなかった。というのも、現実のパリはニコライ専制下のロシヤにおいて逮捕・流刑を繰り返し体験していた亡命以前の彼が思い描いていたあのあこがれのパリとは全く異なっていたからである。かってアレクサンドル一世とともにパリに入城した未来のデカブリストたるロシヤの青年士官たちがその自由な雰囲気ゆえに大きな感銘を受けた一八一四年当時のフランスはもうそこには存在していなかった。七月王政下のフランスは、「物質的な富の追求のためにあらゆる崇高なもの、すべての価値あるものを惜しげもなく捨て去り、平穏無事を臆面もなく謳歌するフランス、社会の全階層がマモンの偶像崇拝に惑溺して恥じることのないブルジョア的フランス」[14]だったのである。英雄時代のフランスははるか過去のものとなっていた。今やフランスの人々にとって富の獲得という物質的要求こそが彼らの志向する最高の価値となっていたのであり、こうした俗物的な価値観に裏打ちされた個性なき集団的凡庸性がフランス社会全体を支配しようとしていたのであった。こうしたフランスの状況を目の当たりにしてゲルツェンは次のように述べている。

「ブルジョアジーの影響のもとに、ヨーロッパではあらゆるものが変わった。騎士的名誉は、会計係の正直さに、優雅な風習は、儀礼に、丁寧さは形式だけのものに変わった。誇りは悔辱を感じやすい心に、庭園は菜園に館は誰

にでも（すなわち金をもっているすべての者に）解放される旅館になった」[15]と。

ゲルツェンにとって救い難いことに思われたのは、彼によってメシチャンストヴォという言葉で表現されたこのフランス社会の精神的俗物性がたんにブルジョアジーという一階級のみに限定される特性なのではなく、それがそうした狭い階級の枠をはるかに越えたところで社会全体を蝕んでいるという事実であった。さらに、フランスをはじめとする西欧社会の倫理的な意味におけるこうした堕落がたんに一つの時代の特異な現象というよりは西欧文明そのものに大きく起因するものであるというゲルツェンの認識は、西欧社会に対する彼の幻滅をよりいっそう深刻なものにしたのであった。そして、六月事件を頂点とする二月革命以後のフランスにおける反動的な政治的諸状況の現出はこのゲルツェンの西欧社会に対する幻滅を決定的なものにしてしまったのである。つい二、三年前まで西欧派の論客として西欧社会を見習うべき理想郷と見なしていた彼は、今や自己の西欧社会に対する認識が根本的に誤ったものであると認めざるをえなかったのである。[16]

こうした思想上の精神的打撃に加えて、彼の家庭をめぐる私的な不幸がゲルツェンをさらなる絶望の淵へと導いていく。海難事故による母と息子コーリャの突然の死、さらには夫ゲルツェンに対する不義ゆえに苦悩し身も心も疲れはてた末の妻ナターリヤの死がそれに続いた。一八四八年から五二年までの四年間に起こったゲルツェンのこの公的及び私的生活における一連の悲劇は、まさに彼を精神的に二度と立ち直ることのできない自己崩壊の危機へと追いつめていくことになるのである。ゲルツェンはこの時期における自らの心情を次のように吐露している。

「いまわたしは何物をも期待していない。わたしが目撃し体験したことのあとでは、何一つわたしをとりわけておどろかせるものもなく、わたしを深く喜ばせるものもない。驚きも喜びも過去の思い出、未来の恐怖によっておしつけられてしまう。ほとんどすべてのことがわたしにとってはどうでもよいものになってしまった。わたしはあし

た死にたいとも思わないし、非常にながく生きたいとも思わない。終わりは始まりとおなじように偶然に無意味に訪れるがいい」[17]と。

このような状態の中で失意の四年間が過ぎ去っていった。一八五二年八月、ゲルツェンはこれといった目的もないままに大陸から新たな亡命先であるロンドンにわたった。しかし、この気まぐれなロンドンへの移住は彼の生涯における重要なターニング・ポイントとなった。この地において彼は四八年革命以後の精神的危機から立ち直り、思想家としての、また政治運動家としての新たな一歩を踏み出していくことになるのである。ゲルツェンをその精神的危機から救ったのは、ロシヤとロシヤの民衆に対する信頼であった。というのも、現実の西欧社会が自身の思い描いていたような理想郷ではないということをはっきりと認識した今、むしろ西欧的な俗物主義に汚されてはいないロシヤにこそ未来があるのだという逆説的な思いが彼の心を強くとらえるようになったからである。そして、こうした彼の思いは、さらに西欧社会の人々のようにブルジョア的な害毒に犯されてはいない素朴なロシヤの民衆こそが来るべき新たな時代の主人公たり得るのだという信仰に近い思いへと発展していくのである。こうして、ゲルツェンの関心は再びロシヤとその民衆へと向けられることになった。以上のようなロシヤへの精神的回帰を果たしたゲルツェンにとって今や何よりも大切な事業は、ロシヤの民衆を専制と農奴制の軛から解放することであった。そして、この政治的課題をなしとげるための主要な手段として彼はロンドンに「ロシヤ自由」出版所を創設することになるのである。当時厳しい検閲下にあったロシヤに外部から積極的な政治的プロパガンダを行うことによってロシヤ社会の覚醒をはかることがその主要な目的であった。その際、専制の根絶と農奴制の廃止を基本的なスローガンとしてロシヤ政府に対して公然と立ち向かったデカブリストたちの運動を大々的にアピールすることは、こうしたゲルツェンの企図にうまく合致するものだったのである。五〇年代から六〇年代にかけて彼によってなされた

デカブリスト・キャンペーンの背景には、一八四八年革命以後のゲルツェンが辿っていった以上のような精神的遍歴が存在していたのである。

第三章　デカブリスト・キャンペーン

『十二月の人』を意味するデカブリストという言葉には、一八二五年一二月の反乱に参加もしくは関与した人々という意味が込められている。ゲルツェンはこのデカブリストという言葉を、一八五七年一一月一日[18]発行の『コーロコル』誌に掲載されたイヴァン・ヤクーシキンの死について知らせる記事の中で初めて公式に用いている。デカブリストという言葉の起源については、今日まで様々な見解が存在しており、ロシヤのデカブリスト研究者たちの間でもその意見は大きく分かれている。彼らの中のあるものはこの言葉が文字通り一八五〇年代後半にゲルツェンその人によって初めて用いられた[19]と主張し、また他のあるものはそれが一九世紀第二四半期にデカブリストたちが流刑されていたシベリヤの住民たちの間で誰ともなく語られ始めたものであると主張する[20]。こうした相異なる見解の存在が示しているように、デカブリストという言葉の起源を明確にすることは現時点においては困難である。しかし、このデカブリストという言葉の発案者が誰であろうと、ゲルツェンがこの言葉を時代を越えてロシヤ内外に普及させたという意味における最大の功労者であったということだけは確かなことである。彼は以下述べていく『北極星』誌や『コーロコル』紙を通じての一連の出版活動によってデカブリストの名を不朽のものにしていくのである[21]。

第一節　『北極星』と『コーロコル』

「ロシヤ自由」出版所創設についての着想が初めてゲルツェンの頭に浮かんだのは一八四九年のパリにおいてであったと言われている。[22] その間ロンドンに移住してくるまで彼がいかなる状況にあったかについては前章において述べた通りである。四年間の精神的苦悩の日々を堪え忍んだゲルツェンは、ロシヤの民衆を専制ロシヤの軛から解放するための最初の事業としてかっての自らの着想を現実のものにするのである。こうして、一八五三年五月、「ロシヤ自由」出版所がロンドンにおいて創設された。デカブリストたちの名はこの出版所におけるゲルツェンの積極的な出版活動を通して五〇年代半ばから六〇年代末にかけて広くロシヤ内外に普及していくことになるのである。その際、デカブリスト・キャンペーンを成功に導くうえで最も重要な役割を果たした刊行物が『北極星』誌と『コーロコル』紙であった。この二つの定期刊行物には、デカブリストたちを扱ったゲルツェンやオガリョフの記事や論文、さらには生き残ったデカブリストたちの手記や資料などデカブリストたちに関する数多くの情報が満載されていた。

『北極星』誌は一八五五年八月にその第一巻が発行された。[23] この雑誌の表紙を飾ったのは、一八二六年七月に処刑された五人のデカブリストたち（ペーステリ、リィレーエフ、カホフスキー、ベスツージェフ・リューミン、セルゲイ＝ムラヴィヨフ・アポストル）のプロフィールであった。しかし、当時彼らの素顔を知るものはなく、これらのプロフィールにはほとんど肖像的な類似性はなかった。[24] このプロフィールを作成したイギリスの彫刻家V・リントン[25]は古代彫刻のポートレートに似せた象徴的なやり方で彼らを描いていた。そこには、処刑された五人のデカブリストたちをプルータスやグラックス兄弟などといったプルタークの『対比列伝』中の登場人物のイメージと重ね

合わせることによって英雄もしくは殉教者としてのイメージを彼らに与えようとする作者の意図が込められていた。[26] また、この雑誌の名称そのものもデカブリスト運動と密接に結びついていた。というのも、これと同名の雑誌がすでに一八二三年から二五年にかけて当時デカブリスト運動の積極的なメンバーであったK・Φ・リィレーエフとA・A・ベスツージェフによって発刊されているからである。[27] ゲルツェンは当然この二人のデカブリストたちの雑誌を念頭において自身の雑誌を「北極星」と命名したのであった。そこには、自らの事業がデカブリストたちの遺志を受け継ぐものであるという意味が込められていた。今は亡き著名なソ連時代のデカブリスト研究者であるH・Я・エイデリマンは「北極星」という名称にはまた次のような興味深い意味が込められていることを指摘している。

「この名称には、もちろん隠された意味があった。というのも、北極星はすでにオデッセイの時代から導きの星だったからである。それにしたがっていけば道に迷わず、それをもって進路を決めれば目的を達することができる。謎がほのめかされている。――読めば迷わないと。なぜなら、読むということは『星』の下に大きな力が結集するということだからである」。[28]

ゲルツェンがこの雑誌をニコライ一世が死去した一八五五年に発刊したのはけっして偶然ではなかった。すなわち、ロシヤにおいてはデカブリストの反乱以後「北極星」はニコライの治世という暗雲の中に隠れてしまっていたのであり、ニコライが死んだ今「北極星」は再び未来のロシヤを導くべく輝き始めたのであるという意味を彼はこの雑誌に込めようとしていたのである。

『北極星』誌は以後一八六二年までの間に七巻を数え、一八六九年にその最終巻となる第八巻が発刊された。全八巻を通して見るとその紙面は二、三二〇ページから成り、全部で一九五の作品が掲載されていた。その内、一、

二七〇ページを『過去と思索』を中心とする三六のゲルツェンの作品が占め、二七七ページをオガリョフの七つの論文と三九の詩編が占めていた。[29] これらの数字から『北極星』誌におけるゲルツェンとオガリョフの指導的な役割が如何に大きなものであったかがうかがえる。さらにこの雑誌の残りの紙面を埋めるための数多くの情報をゲルツェンたちに提供したのが、Е・И・ヤクーシキン、[30] Н・Х・ケッチェル、П・Л・ピクーリンといったロシヤ在住の通信員たちであった。彼らによってロシヤ本国から送られてきたデカブリストたちに関する最新の情報は、『北極星』誌をはじめとするゲルツェンたちの出版活動により客観的な意味を与えることに大いに役立ったのである。

『北極星』誌の成功は、ゲルツェンをさらなる野心的な企画へと導いていった。『コーロコル』紙の発行がそれである。ロシヤ語で「鐘」という意味をもつこの新聞は長い間隔をあけて発刊される『北極星』誌とは違って、最初は月に一回、後には月に二回の割合で定期的に発行された。一八五七年七月にその第一号が発行された『コーロコル』紙は以後六七年までの約一〇年間でほぼ二四五号を数えることになるのである。通常二、五〇〇部から三、〇〇〇部（増刷分を計算に入れると四、五〇〇から五、〇〇〇部）の間を推移したその発行部数（一〇年間を通して計算すると約五〇万部に達したと考えられる）は、当時文盲率の高かったロシヤの現実から考えて驚異的な売れ行きであったと言えるだろう。[31] それは当時のロシヤにおける最も著名な新聞の発行部数と比較してもけっして見劣りするものではなかったのである。こうして、デカブリストたちの名はこの『コーロコル』紙を通じて数多くのロシヤ人たちの脳裏に刻み込まれていくことになるのである。

以上、『北極星』誌と『コーロコル』紙というデカブリスト・キャンペーンに大きな役割を果たした二類種の刊行物について簡単な説明を行ってきたが、次節ではこの二つの刊行物を中心としたゲルツェンの出版活動の内容をデカブリストたちとの関連において具体的に言及していくことにしたい。

第二節　デカブリスト・キャンペーンの展開

ゲルツェンはすでに『ロシヤにおける革命思想の発達について』（一八五一年）の中でデカブリストたちについて多くを語っているが、いわゆる彼のデカブリスト・キャンペーンがその本格的な展開を見せるのはやはり一八五五年における『北極星』誌の発刊以降であると言えよう。その際、ゲルツェンによるこのデカブリスト・キャンペーンの展開に大きな弾みをつけることになった出来事がシベリヤからのデカブリストたちの帰還であった。

アレクサンドル二世が即位した一八五六年八月二六日、『国家犯罪人の恩赦に関する元老院の勅令』[32]が布告された。これによって、シベリヤに流刑となっていたデカブリストたちのヨーロッパ・ロシヤ（サンクト・ペテルブルクとモスクワを除く）への帰還が法的に可能なものとなった[33]。この公布にしたがって、当時シベリヤにいた三四人のデカブリストたちのうち三一人がヨーロッパ・ロシヤへの帰還を決意し、一八五六年八月から一八六三年までの間にその大半がヨーロッパ・ロシヤへの帰還を果たした[34]。

このデカブリストたちの帰還後まもなく、当時ロシヤ政府の高官であったモデスト・コルフによって『皇帝ニコライ一世の即位』（一八五七年）が出版される[35]。デカブリストたちの帰還は知識人階級を中心にロシヤ国内に彼らに対する好意的な世論を生み出しつつあった。コルフの書物はデカブリスト事件に関するロシヤ政府の公式見解を踏襲したものであり、デカブリストたちの帰還をめぐるこうした好意的な世論の高まりに対する「一種の鎮静剤」として書かれたものであった。この書物の中ではデカブリストたちは終始「叛徒」であった。コルフはデカブリストの反乱を評して次のように述べている。

「叛徒たち自身の隊伍の中でさえ、ひと握りの極悪人の企図は、全く、兵士たちの考えではなかった。極悪人たち

の犯罪目的は、彼らによって連れ出された兵士たちの共感を全く得ていなかった[36]」。

こうしたコルフのデカブリスト評価に対して、ゲルツェンは徹底的な反モデスト・コルフの論陣を張ることになる。ゲルツェンはオガリョフと協力して一八五七年には『一八二五年のロシヤの陰謀』を、さらに翌年には『一八二五年一二月二六（一四）日と皇帝ニコライ』を出版する。ゲルツェンは述べる。「コルフ男爵の書物を前にして、われわれは沈黙し得ないし、すべきではない。何処においても自由なロシヤの言葉が鳴り響くようにするために祖国を離れたわれわれだけが、われわれの偉大な先駆者たちのために自己の意見を言い得るのである[37]」と。彼はコルフの書物を「宮廷宦官の卑しい作品[38]」と批判しつつ、デカブリスト運動におけるペーステリの役割を強調することによってデカブリストたちの積極的な弁護に努めたのであった。

ゲルツェンはさらにデカブリストたちの存在を強調し、彼らに関する自らの主張により客観的な根拠を与えるために幾つかの新しい企画を推し進めていく。デカブリストたちの死についての記事を『コーロコル』紙上に掲載したり、彼らの『手記』を出版したりする試みがそれである。一八五九年に『コーロコル』紙にデカブリストИ・И・プーシチンの死亡の記事を掲載しながらゲルツェンは次のようにつけ加えた。

「われわれはそのことをあまりに遅く知ったことでわれわれの通信員たちを非難した。……われわれの英雄的な年長者たちに関わる全てのことがシグナルとならなければならない[39]」。

このようにして、ゲルツェンはヤクーシキンを手始めとして、プーシチン、С・П・トルベツコーイ、Н・П・ゼブリコーフ、А・Н・ムラヴィヨーフ、С・Г・ヴォルコーンスキーといったデカブリストたちの追悼文を次々に掲載していった。同時に、ゲルツェンはデカブリストたちによって書かれた手記の出版を開始する。当初、それらは『北極星』誌に掲載されていたが、後に一八六二年から六三年にかけて一つの独立した文芸作品集として定期

出版された[40]。この文芸作品集は『デカブリストの手記』シリーズと題された。ゲルツェンはこれらが歴史的事実との関連において「ロシヤ解放の最初の功労者たち」の特徴を再現する手助けとなると考えてこの企画に大きな意欲をもって臨んだのである[41]。彼はこのシリーズを開始するに当たって、一八六二年九月一日付の『コーロコル』紙上において次のように述べている。

「最初の発送分のデカブリストたちの手記がわれわれの手元に届いた。われわれはそれに対するわれわれの感謝の意を表わす言葉をもたない。逐に、ロシヤ解放の最初の推進者たちの幻影が明らかになろうとしている。プルードフやコルフによって彼らを知っている多くのものは、彼ら自身の言葉によって彼らを理解するようになるであろう[42]」。

こうして、一八六二年から翌六三年にかけて、ヤクーシキン、トルベツコーイ、H・ベスツージェフ、プーシチン、M・C・ルーニンといったデカブリストたちの手記が次々と出版されていった。

以上述べてきたように、ゲルツェンは主として一八五五年から六三年にかけて積極的にデカブリスト・キャンペーンに取り組んでいった。しかし、六二年以降、ゲルツェン自身のロシヤ本国に対する影響力はポーランド問題をめぐる彼の政治的態度のゆえに急速に衰えていくことになる。当時、愛国主義的風潮の高まりを見せたロシヤにおいて、ポーランドの革命運動支持を積極的に訴えるゲルツェンの主張は、彼らの間で祖国ロシヤに対する裏切り行為と映じたのであった。そして、それによってゲルツェンの出版活動も六〇年代半ば以降危機的な状況へと追い込まれていくのである。また、ロシヤそのものも一八六六年に起こったカラコーゾフ事件を契機とする政治運動に対する仮借なき弾圧によって暗い反動の時代に入ろうとしていた。アレクサンドル二世治世初期における改革期特有の自由主義的なロシヤの時代は確実に終わりつつあった。そのような時期において、ゲルツェンは再びデカブリス

トたちをテーマとした論文を『コーロコル』紙上に掲載する。『一八二五年の英雄たちとその先駆者たちについての歴史的概観』[43]（一八六八年四月～七月）がそれである。この著作において、彼はかって自らが出版したヤクーシキンのそれをはじめとするデカブリストたちの手記に依拠しながらデカブリスト運動が展開されたアレクサンドル一世時代のロシヤにおける自由主義的改革について言及した。彼はこの著作を通して反動期の自由なき悲運のロシヤに再びかってロシヤ社会の自由主義的変革を求めて闘ったデカブリストたちの存在を想起させたかったのである。この時期、ゲルツェンは自身の個人的な書簡においても盛んにデカブリストたちについて語っている。晩年の彼にとってデカブリストたちの存在は自らの活動をその根底から支えてくれる心の拠り所的な役割を果たしていたと考えられる。[44] ゲルツェン自身のロシヤに対する影響力は先に述べたように六〇年代を通じて急速に衰えていった。典型的な四〇年代人であった彼の思想は、もはやチェルヌイシェフスキーに代表される当時のロシヤの若い世代にとっても魅力なきものになっていた。こうした状況の中で、ゲルツェンは一八七〇年一月二一日失意のうちにパリで寂しく息をひきとることになる。しかし、ゲルツェンによって広められたデカブリストたちのイメージそのものは、ロシヤにおける彼の政治的かつ精神的権威の失墜にもかかわらず時代を越えて後のロシヤの人々に長く語り継がれていくことになるのである。

第四章　デカブリスト「伝説」の創造

ゲルツェンによって展開されたデカブリスト・キャンペーンのロシヤにおける効果には絶大なものがあった。デカブリストたちの存在はこのキャンペーンが行われたごく短期間のうちに多くのロシヤ人たちの知るところとなっ

たのである。そして、彼らのほとんどが一時期デカブリストたちに関して一定のイメージを共有することになった。すなわち、ロシヤ社会の革命主義的変革に自らの生涯を捧げた「鉄の人」＝デカブリストのイメージがそれである。ゲルツェンは『北極星』誌や『コーロコル』紙における精力的なプロパガンダを通じて自らが創り上げた理想的なデカブリスト像をロシヤ内外に普及させていった。それは一種の「伝説」の創造と言ってよい作業であった。こうして、彼によって創り上げられたデカブリスト「伝説」は後のロシヤにおける革命運動の展開に少なからぬ影響を及ぼしていくことになるのである。

本章では、まずゲルツェンのデカブリスト評価の基礎となっている彼のデカブリスト像について言及し、ついでゲルツェンによってデカブリスト「伝説」が創造されるに至った当時の時代的背景について考察していくことしたい。

第一節　ゲルツェンのデカブリスト像

ゲルツェンによって書かれた一連の著作においてデカブリストたちについて言及された箇所は膨大な数にのぼっている。そうした彼の一連の著作のうち、主としてデカブリストたちをテーマとして書かれた作品に一通り目を通すと、そこにはゲルツェンが抱いていた一定のデカブリスト像が明確に浮かび上がってくる。というのも、こうした著作において彼は自らのデカブリスト評価のキー・ワードとなる幾つかの言葉を繰り返し使用しているからである。――殉教者、英雄、戦士、革命主義者、理想主義者、情熱家、自己犠牲の精神に満ち溢れた人々等の言葉がそれである。これらの言葉から分かるように、デカブリストたちは彼にとってロシヤ社会の変革のために自らを犠牲にした偉大な英雄たちであり、自己の信念にしたがって革命に殉じた情熱的な理想主義者たちであった。こうした

ゲルツェンのデカブリスト理解は、疑いなく「雀カ丘の誓い」に象徴される少年時代における彼の劇的な体験と密接に結びついていた。先に述べたように、『過去と思索』執筆当時（一八五二年）にゲルツェンが「後追い的に」抱いていたデカブリストたちに対するロマンチックなイメージがそのまま一八五五年以降に本格的に展開されるデカブリスト・キャンペーンにおける彼の評価に如実に反映されているのである。彼のペンの下でデカブリストたちをめぐる物語は、次第に「シラー的なレパートリーから取り入れられた英雄主義的な色彩によって飾りたてられたロマン主義的な神話」[45]になっていった。一八六四年に『おわりとはじまり』の中でゲルツェンがデカブリストたちについて語っている次の一節は、こうした彼のデカブリスト像を端的に表現した興味深い文章であると言えるだろう。

「彼らは頭から足の先まで純粋な鋼鉄によって鍛え上げられたある種の英雄たちであり、若い世代を新たな生活へと目覚めさせるために、また死刑執行人や下僕たちの間で育てられた子供たちを清めるために、意識的に明白な破滅への道を歩んでいった雄々しき戦士たちであった。しかし、いったい誰が彼らの魂に清めの火を灯し、いかなる偉大な力が彼ら自身に自らの内に積もり積もった腐敗や汚濁を拒否させ、彼らを未来の殉教者にしたのだろうか？」[46]

このように、ゲルツェンはデカブリスト＝「頭から足の先まで純粋な鉄鋼によって鍛え上げられた英雄たち」という一定の明確なイメージを創り上げていった。その際、彼のこうしたデカブリスト像の創造において最も重要な役割を果たしたのがペーステリをはじめとする処刑された五人のデカブリストたちであったことは言うまでもない。専制政府に対する公然たる武装蜂起を指導し断頭台の露と消えた彼らの存在は、ゲルツェンのデカブリストたちに対する想像力をいやが上にもかき立てるものであった。先に述べたように、ゲルツェンが『北極星』誌の表紙に処刑された五人のデカブリストたちのプロフィールを使用したのも彼らの運命が自己の信念に殉じた革命主義者としてのイメージを最もシンボリックに強調し得るものだったからである。さらに、シベリヤの流刑地において苦

難に耐え抜いた幾多のデカブリストたちの生涯もゲルツェンのデカブリスト像の創造に大いなるインスピレーションを与えるものであった。特にアレクサンドル一世の暗殺を計画し、反乱鎮圧後もロシヤ政府に対して頑強な態度をとり続けたヤクーシキン[47]やルーニン[48]といったデカブリストたちは、ゲルツェンが創り上げようとした「典型的な」デカブリスト像に客観的な根拠を与える上で不可欠の存在だったと言えるであろう。

以上のように、ゲルツェンはデカブリストたちを戦闘的な革命主義者として描き上げることによって彼らをロシヤにおける革命運動のシンボリックな存在にしようと努めた。しかし、こうした彼のデカブリスト理解には明らかに歴史的事実に即応し難い大きな誇張があったと言えよう。というのも、ゲルツェンがデカブリストたちに与えようとした革命主義的なデカブリスト像はごく一部のデカブリストたちにのみ当てはまるものなのであり、彼らの多くはけっして彼が描き上げたような確固たる革命主義者ではなかったのである。ゲルツェンが象徴的に表現したデカブリストの反乱をめぐる一連の事件の背後には後にデカブリスト運動と呼ばれることになる一〇年余りに及ぶデカブリストたちの苦脳と模索の過程が存在していたのであり、彼らの多くはその全期間を通じて終始政府主導の穏健な改革路線の展開に淡い期待を持ち続けていたのである。[49] ゲルツェンは当時こうしたデカブリスト運動に関する詳細な資料を持ち合わせてはいなかった。裁判記録をはじめとするデカブリスト事件に関する資料の多くが未公開であった当時の状況において、彼は入手し得た数少ない情報に依拠しながら半ば無意識のうちに自らがこうあって欲しいと望んだ理想的なデカブリスト像を追い求めていったものと考えられる。その際、何度も繰り返すことになるけれども、こうした彼のデカブリスト理解の原点となっていたものはやはり彼の少年時代におけるデカブリスト・インパクトであったと言えるだろう。しかし、ここで一つだけはっきりさせておかなければならないことは、ゲルツェンがただ単に政治的プロパガンダとの関連において自らの政治的信条にとって都合のよいデカブリスト像

を全く意図的に創り上げていったのではけっしてなかったということである。[50] デカブリストたちは彼にとってあくまでも言葉の正確な意味における「英雄」たちだったのであり、専制政府に対して公然と立ち向かった「確固たる革命主義者」だったのである。そうした彼のデカブリストたちに対する主観的な意識が当時自らが保持していた政治的信条と結びついた時、デカブリスト「伝説」は自然に生まれるべくして生まれたのであった。すなわち、ロンドン亡命後の彼が最も重要な政治課題と考えていたロシヤ社会の政治的覚醒を促す上で、自らが抱き続けてきたデカブリストたちについてのイメージはまさにかっこうの題材を提供してくれるものだったのである。ここにゲルツェンが積極的にデカブリスト「伝説」を創り上げていった、もしくは創り上げていかねばならなかった主要な動機が存在していたと言えるのである。

第二節　「伝説」創造の時代的背景

ゲルツェンによるデカブリスト「伝説」の創造は、当時彼がおかれていたヨーロッパの政治的諸状況と密接に結びついていた。「一八四八年」革命以後のフランスにおけるブルジョア政府による反動的な諸政策の推進の中でゲルツェンの西欧社会に対する幻滅が頂点に達したことについてはすでに述べた通りである。西欧社会が自らが描いていたような理想社会ではないということをはっきりと認識したゲルツェンにとって、自らをその深刻な精神的苦悩から救い出してくれたものはロシヤとロシヤの民衆に対する信仰に近い思いであった。こうしたロシヤに対する精神的回帰を経て、ゲルツェンはロシヤ社会の政治的覚醒をその主要な目的として政治的ジャーナリストとしての道を歩み始めることになるのである。デカブリスト・キャンペーンはこうした彼による一連のジャーナリズム活動の重要な一部をなすものであった。彼はデカブリストたちを「ペテルブルクの専制」に対する闘争のシンボル[51]にする

ことによってロシヤ社会に革命主義的な潮流を生み出そうと試みたのである。

ゲルツェンにとってデカブリスト・キャンペーンの最大の狙いは、ロシヤの人々に彼らが手本とすべき「偉大な革命の先駆者たち」の伝説を与えることであった。一八五一年に書かれた『ロシヤにおける革命思想の発達について』における次の一文は、彼が当時デカブリストたちの中に如何なる政治的な意義を見い出していたかを知る上で興味深い文章であると言えるだろう。

「一二月一四日は、確かに、我々の政治的教育に新しい局面をひらいた。奇妙なことに思われるかもしれないが、この事件のもつ大きな影響力、宣伝や理論よりも、強く作用したその大きな影響力のよってくるところのものは、反乱そのものであり、広場における、あるいは、裁判のときの足かせをつけられているときの皇帝ニコライの面前における鉱山やシベリアにおける謀反人たちのヒロイックな態度であった。ロシヤ人に欠けているものは、自由主義的な志向でもなく、悪弊に対する意識でもない。創意の勇気を彼らに与えるべき先例である。信念は、理論によって与えられる。行動は、手本によって形づくられる」[52]。

このように、ゲルツェンのデカブリスト評価において最も重視されていたものはデカブリストたちの英雄的な行動そのものであった。彼はこうしたデカブリストたちの英雄的な行動を強調することによってロシヤの人々が手本とすべき政治的「伝説」を創り上げようとしたのである。ロンドン亡命後のゲルツェンの心を大きく捕らえていたものは、如何にすればロシヤの民衆を政治的に覚醒させ、かつ彼らを自らの解放運動へと向かわすことができるかという問題であった。そうした状況の中で彼は「伝説」もしくは「神話」というものがもつ政治的効果について重要視するようになっていった。一八五〇年代に彼によって書かれた一連の著作は、この時期の彼が各々の国もしくは民族の歴史における政治的「伝説」の役割を如何に重く見ていたかを如実に物語っている。こうした著作の中で

彼は民衆を果敢な革命主義的行動へと導く手本となるべき英雄たちの偉大な行動を手放しで礼賛している。『過去と思索』の中で言及された「イタリア賛歌」[53]の一節も、ゲルツェンがそうした政治的「伝説」との関連において個人の英雄的な行動を如何に重視していたかを端的に示したものであると言える。ゲルツェンはイタリアの二人の革命家を取り上げ、彼らによってなされた行動について次のように述べている。「それにしてもなんという、はげしい情熱のほとばしり、なんという手本があったことだろう」[54]と。彼らのうちの一人は一八五八年にナポレオン三世暗殺未遂のかどで断頭台の露と消えたフェリーチェ・オルシーニであり、他の一人は一八五七年にマッツィーニとともにナポリ王国に革命的遠征を行った際に英雄的な死を遂げたカルロ・ピザカーネ[55]であった。ゲルツェンは先のくだりにさらに続けてこの二人の英雄的な行動を次のように評価している。

「わたしは現在のフランスが陥っているような、深い堕落からの救済が、ひとりの人間を殺すことによって可能になるとは思わない。わたしはピザカーネの上陸作戦の基礎になった計画を弁護するつもりはない。それは、その前の二度のミラノ蜂起の試みとおなじように時宜をえないものであった。しかし、問題はそのことではない。わたしがここで語りたいのはその計画の実行のことである。これらの人々は、その悲劇的な詩情やおのれの恐るべき力の偉大さによって人の心を圧倒し、どんな批判や避難をもおしとめてしまう。ギリシア人のもとにも、ローマ人のもとにも、またキリスト教や宗教改革の殉教者たちのあいだにも、わたしはこれにまさるヒロイズムの例を知らない」[56]。

ところで、ゲルツェンにこうした「伝説」創造の必要性を認識させる上で大きな影響を与えたのはバクーニンやプルードンといった著名な革命主義的アナーキストたちであったと言われている[57]。「一八四八年」革命以後、俗物的なブルジョアジーの公然たる裏切り行為に幻滅した彼らは、未だブルジョア的な俗物主義に汚されてはいない一般大衆の革命主義的な「本能」に期待をかけ、彼らの個人的な力を如何にして革命のための偉大な闘争に向かわせる

かということに心を配っていた。そうした状況の中で、彼らは「ポポロ連帯の効果的な道具立て」[58]としての政治的「伝説」もしくは「神話」の必要性について強調するようになっていく。こうして、「二月革命」以後、主としてバクーニンやプルードンの影響を受けた多くの革命主義者たちが「伝説」に関する以上のような認識を共有することとなり、自国の歴史の中にそうした「ポポロ連帯のための道具立て」としての「伝説」となるべき英雄たちを捜し求めていった。当時このようなヨーロッパの革命主義者たちの陣営には、ゲルツェンをはじめとしてマッチーニ、ミシュレ、プルードン、ユゴー、ルイ・ブラン、バクーニン及びリントンといった人々が集まっていた。[59]彼らにとって共通の課題は如何にすればヨーロッパの民衆を革命主義的な行動へと駆り立てていくことができるかということであった。それ故に、彼らは一種の共同作業として「ポポロ連帯のための道具立て」としての「伝説」の創造に着手したのだと考えられる。フランスの著名な歴史家であったミシュレがゲルツェンの著作に言及しながらデカブリストたちをはじめとするロシヤの殉教者たちを取り扱った自身の書物に『北方の民主主義的伝説』[60]という題名をつけたのも、こうしたヨーロッパの革命主義者たちが共有していた当時の政治的な連帯意識とけっして無関係ではなかったのである。ゲルツェンがロシヤの革命主義的な伝統をヨーロッパのそれらと関連させて考えたのも以上のような政治的な連帯意識が彼の念頭にあったからであると考えられる。彼はデカブリストたちを「リェゴとミーナ、カルボナリ、ツーゲント・ブント、B・コンスタンと一七九二年の革命主義的な伝統」[61]といったロシヤ以外のヨーロッパにおける革命主義的な潮流と結びつけることによって、ロシヤと他のヨーロッパ諸国における政治運動の密接な連関性について強調している。すなわち、ゲルツェンはフランス革命以後のヨーロッパにおける革命主義的な諸事件の連関性を強調することによって現下のヨーロッパにおける革命主義的な政治勢力の結集を図ろうと努めたのであった。

以上のように、ゲルツェンによるデカブリスト「伝説」創造の試みは当時のヨーロッパにおける革命主義的な政治運動と密接に結びついていた。その意味で、ロシヤ社会の政治的覚醒をその主要な目的としてなされたデカブリスト・キャンペーンは、単にロシヤ一国のみを視野に入れて展開されたものなのではなく、こうしたヨーロッパ全体の革命主義的な政治運動の重要な一翼を担うものでもあったと言えるのである。

第五章　ゲルツェンと「革命主義」的デカブリスト評価

第一節　革命主義的デカブリスト「伝説」

これまで見てきたように、ゲルツェンのデカブリスト評価は革命主義的なデカブリスト理解を基調とするものであった。デカブリスト・キャンペーンによって彼によって創り上げられたデカブリスト像には、ロシヤの革命運動に殉じた「鉄の男」＝デカブリストのイメージが色濃く表われていた。そして、こうしたデカブリストたちについてのイメージには先にも述べたように明らかに歴史的事実以上のものがあったと言える。後に、ソ連史学界において一大学派を形成したM・H・ポクロフスキーがゲルツェンのデカブリスト評価を「革命主義的伝説」[62]と呼んだのも彼によるこうした半ば意図的といってもよい革命主義的なデカブリスト理解を批判してのことであった。[63]

こうしたゲルツェンによるデカブリスト評価における革命主義的な性格を理解する上で次に掲げる二つの事例はわれわれに多くの興味深い示唆を与えてくれるように思われる。その一つはデカブリストの反乱についての彼の評価であり、他の一つはペーステリとツルゲーネフという二人のデカブリスト運動の指導者たちについてのそれであ

る。デカブリストの反乱は何度も繰り返すことになるけれども、ゲルツェンのデカブリスト評価のまさに原点に位置づけられるものであった。この反乱に対する彼のアプローチの仕方には、極めて濃厚な革命主義的性格が滲み出ていると言える。ゲルツェンは現下のロシヤの民衆を公然たる革命的反抗に導くためにも彼らの手本となるべき先例をデカブリストたちの英雄的な行動の中に見い出していた。こうした彼の意識において、デカブリストの反乱はロシヤの民衆を政治的に目覚めさせるためのまさにかっこうの「道具立て」だったのである。ゲルツェンは言う。「イサク広場の大砲は全世代の人々を呼び覚ました。この時まで、ペテルブルグの中心において、手に武器をもち、皇帝＝ツァーリズムの巨人に対する攻撃を志した政治的蜂起の可能性を誰一人として信じなかった[64]」と。彼によれば、「一二月一四日の蜂起の試みはそうであると思われたほど気違いじみたものではなかった[65]」のであり、反乱そのものは結果的に失敗したとはいえ、「成功はけっして不可能なものではなかった[66]」のである。デカブリストの反乱に対するゲルツェンのこうした「革命主義」的なアプローチの仕方は、後にさらに徹底したものになつていく。即ち、デカブリストの反乱が失敗した主たる理由を彼はこの反乱における民衆の欠如に求めていくのである。「反乱の日、イサク広場と第二軍の中心地において、陰謀者たちに欠けていたもの、それは民衆である[67]」と。このように、デカブリストの反乱に対するゲルツェンの政治的アプローチの仕方には明らかに「革命主義的扇動」といった意味合いが強く込められていると言えるのである。

こうしたゲルツェンの「革命主義」的なアプローチは、ペーステリとツルゲーネフという二人のデカブリスト運動の指導者たちの評価においてもはっきりと表れている。デカブリスト左派の領袖であったペーステリはゲルツェンにとって幾多のデカブリストたちの中でも特別な存在であった。というのも、彼は急進主義的な革命路線の支持者であり、断固たる軍事クーデターの主唱者だったからである。ゲルツェンは『一八二五年のロシヤの陰謀』にお

いて多くの紙面をペーステリに割き、その中で軍事クーデター成功の暁には臨時独裁を施き、皇族をすべて処刑すべきであるという彼の主張に全面的な支持を与えている。[68] また、ゲルツェンはデカブリストたちの中で唯一ペーステリのみが武装蜂起への民衆の参加を考えていたと述べることによって彼を以下のように賞賛している。

「ペーステリは民衆を革命に参加させようと構想した。彼は蜂起は軍隊の援助なしには成功しえないと主張する同志に賛成したが、分離派をそこに引き込むことを欲していた――深い構想、組織性、先見性[69]」。

ペーステリに対するこうした手放しの評価と比べて、ツルゲーネフに対するゲルツェンのそれは全く対照的である。デカブリスト右派の領袖の一人であったツルゲーネフは政府主導の体制内的な社会変革の主唱者であり、彼の穏健で自由主義的な改革路線の主張はペーステリの急進主義的な革命路線のそれと真っ向から対立するものであった。ツルゲーネフは亡命先のパリにおいてデカブリスト事件について言及した『ロシヤおよびロシヤ人』[70]を出版し、穏健な自由主義者の立場からデカブリストの反乱と自身の政治的立場との思想的連関性を拒否した。ゲルツェンはこうした彼の見解を時代遅れの「アナルコ・リベラリズム」[71]として激しく非難している。ゲルツェンにとって急進主義的な革命路線を常に主張し続け断頭台の露と消えたペーステリがまさに自らが創り上げようとしたデカブリスト像の「典型」とも言うべき存在であったのに対して、穏健な改革路線の支持者であり、デカブリスト運動から革命主義的な性格を取り去ろうと努めたツルゲーネフはこうした彼の「典型的な」デカブリスト像をその根底から破壊しかねない好ましからぬ存在だったのである。[72]

以上、二つの事例を提示してゲルツェンのデカブリスト評価が如何に革命主義的な性格の色濃いものであったかということについて言及してきた。こうした二つの事例が示すように彼はデカブリストたちをあくまでも確固たる革命主義者の枠内で評価しようと努めたのである。こうした「革命主義的」デカブリスト評価が当時ゲルツェンが

保持していた政治的身上を色濃く反映したものであったことはいまさら言うまでもないであろう。しかし、デカブリストたちに対するこのようなゲルツェンの「革命主義」的なアプローチは、必然的にデカブリスト運動がその革命主義的な側面とは別にその当初から有していたもう一つの重要な側面に対する否定的な評価につながっていく潜在的な可能性を伴っていた。すなわち、このゲルツェンの「革命主義」的デカブリスト評価は、ロシヤ社会を穏健な自由主義的諸政策の積み重ねによって漸進的に変革していくことを主張したいわゆるデカブリスト右派に属する人々、もしくはそうした穏健で漸進的な改革路線をその基本的な戦術として採用していた初期デカブリスト運動を否定的に捉えるデカブリスト解釈に大きく道を開くことになるのである。われわれはそうした事実を後にレーニンのデカブリスト評価を経てペレストロイカ以前のソ連史学における「公式」的なデカブリスト理解の中に見い出だすことになるのである。

第二節　レーニンのデカブリスト評価とソ連史学

一八七〇年のゲルツェンの死後、デカブリストたちはゲルツェンその人の手を離れて多くの歴史家や思想家たちによって種々様々に評価されていく。ある者は自由主義的な立場[73]から、またある者はナロードニキ主義的な立場[74]からデカブリストたちを自らの歴史観にとって都合のよい歴史的シンボルとして描き上げようと努めた。そうした様々なデカブリスト解釈があたかも「神々たちの戦い」よろしく飛び交う状況の中で、ゲルツェンによって創り上げられた「革命主義」的なデカブリスト像の原形を継承し、そのデカブリスト像を自らが構築した固有の歴史観に基づいて位置づけていった人物こそロシヤ革命運動の父とも言うべきB・И・レーニンだったのである。彼は二〇世紀初頭から一九一七年のロシヤ革命までの間に、『ザリャー』、『ソツィアル・デモクラット』及び『プロレタリア

ート」といった諸々の機関紙を通じてゲルツェンのデカブリスト評価を徹底した革命的民主主義者の立場から焼き直していった。ゲルツェンと同じく、レーニンにとってもデカブリストたちの評価に当たって何よりも重視すべき対象はデカブリストの反乱そのものであった。そのことは彼が一八二五年一二月一四日をロシヤにおける革命運動のまさに出発点として位置づけていることからも容易に理解できる。彼は言う。「ロシヤでは一八二五年に初めてツァーリズムに対する革命運動が現われた」[75]と。レーニンはまた、これもゲルツェンと同じくペーステリに代表される一部のデカブリストたちが保持していた共和主義思想の意義を高く評価した。こうした「革命主義」的デカブリスト理解を基礎として、さらにレーニンは一九一二年から一七年にかけて順次出版されていった「ゲルツェンの追想」[76]、「解放運動における諸身分と諸階級の役割」[77]、「ロシヤにおける労働者出版物の過去から」[78]及び「一九〇五年の革命についての講演」といった一連の論文において、デカブリストたちを彼が構築しようと努めたロシヤ革命運動史のシェーマの中に組み込んでいった。彼はロシヤの革命運動を三つの段階に区分し、デカブリストたちをその第一段階である「貴族革命」期の代表的革命家として位置づけた。彼によれば、革命運動はさらにナロードニキたちに代表される「雑階級革命」期へと継承され、最後にロシヤの民衆を真に政治的に覚醒させることができる「プロレタリヤ革命」期へと至るとされる。このようなロシヤ革命運動史の枠組みを前提として、レーニンは階級的な観点からデカブリストたちの政治的限界性について言及していった。彼は次のように述べることによって「貴族」革命家としてのデカブリストたちの階級的限界性を指摘する。「これらの革命家たちの範囲は狭い。彼らは民衆からおそろしくかけ離れている」[79]と。すなわち、レーニンによれば、デカブリストたちの階級的限界性は、彼らの政治的一貫性の欠如、専制政府への期待とそれへの自由主義的な要求の中に、そして、何よりも「民衆との隔絶性もしくは民衆の名の下での民衆の積極的参加なき革命的変革達成の志向」[80]の中にはっきりと現われていた。このように、

レーニンのデカブリスト評価は、ゲルツェンの「革命主義」的デカブリスト評価を徹底した革命的民主主義者の立場から焼き直して創り上げられたものであった。そして、こうしたレーニンのデカブリスト評価は一九三六年のポクロフスキー批判[81]以後のソ連史学における「公式」的デカブリスト評価のまさに基礎となっていくのである。

ソ連のデカブリスト史家たちは一般に革命前のデカブリスト評価の主要な流れを専制政府、自由主義及び革命主義という三つの相異なる立場に分けて説明する。これらの中で彼らにとって最も評価すべき立場はもちろん革命主義的なそれであり、ゲルツェンはこうした革命主義的デカブリスト評価のまさに始祖的意義を与えられている。ポクロフスキー批判以後のソ連におけるデカブリスト研究の第一人者であったM・B・ネーチキナはデカブリスト研究におけるゲルツェンの役割を次のように評価している。「デカブリストの革命主義的理解を生み出すことになった最初の詳細な研究上の功績はA・И・ゲルツェンに属する[82]」と。ネーチキナをはじめとしてソ連におけるデカブリスト史家たちの多くが専制政府によるデカブリスト評価の偽瞞性を暴露し、革命主義的デカブリスト評価の真の理解の道を切り開いた人物としてゲルツェンを高く評価している。しかし、その一方で彼らは先に述べたレーニンのデカブリスト評価にしたがってゲルツェンがデカブリストたちを理想化しすぎ、かつ彼らの運動の階級的限界性について認識していなかったとして彼を次のように批判する。

「ゲルツェンはこの運動の階級的本質が分からず、自己の英雄たちを理想化し、『頭から足の先まで純粋な鋼鉄によって鍛え上げられた闘志たち』のイメージを創り上げた。もちろん、かくも有頂天となった公式にはデカブリズムの脆弱な側面は反映されていなかった[83]」と。

ソ連における「公式」的なデカブリスト評価にしたがうならば、デカブリスト運動は客観的にはブルジョア的な変革を志向する貴族たちの運動だったのであり、こうした貴族的な運動にはその戦術・綱領といった点で必然的に

階級的限界性が伴っていた。デカブリストたちの多くが政府による自由主義的諸改革の推進に期待を寄せる穏健な改革路線の支持者たちであったこと、また農業綱領においてもその多くが土地なしの法的農奴解放を主張していたことなどがそうした彼らの階級的限界性を示す最たるものであった。その際、ソ連のデカブリスト史家たちによる批判の主たる対象となったのが、Н・И・ツルゲーネフをはじめとするデカブリスト穏健派の指導者もしくは漸進的な体制内的改革路線をその基調とする「福祉」同盟の活動に代表される初期デカブリスト運動であった。彼らにとって評価すべき対象はあくまでも「デカブリストの反乱」という決定的な武装蜂起へと至るペーステリやリィレーエフといったデカブリスト左派に属する人々の活動に代表される急進主義的な後期デカブリスト運動なのであり、そうした彼らの意識において、体制内的変革路線を基調とする初期デカブリズムはデカブリストたちが革命家となるために克服されるべき対象だったのである。すなわち、「貴族革命家たちは、彼らがその歩みの中で……啓蒙主義的・自由主義的概念を克服し、『啓蒙君主』への期待から解放され、もっぱら政治的に導かれる改革に結びつけられた幻想を捨て去ったことの故に革命家[84]」なのであった。このように、ソ連の「公式」的デカブリスト評価にはデカブリスト右派もしくは初期デカブリスト運動に対する否定的な立場が如実に現れていると言えるのである。

結　語

著名なデカブリスト史家アナトール・マズーアは、その主著とも言うべき『最初のロシヤ革命』の結論部分においてデカブリストの反乱百周年を記念して述べられたある論者の次の発言を引用することによってデカブリストたちをめぐる伝説が後のロシヤにおける革命運動の展開に与えた影響の大きさについて強調している。

「革命の歴史的価値は三つの条件に依存している。すなわち、革命が破壊するものに、革命が創造するものに、および革命が後世に残す伝説に。……デカブリストは何も破壊もせず創造もしなかった。デカブリストの業績の価値は全くかれらの伝説にある。しかしこれで十分である[85]」。

アメリカのロシヤ史家マーク・ラエフもまた次のように述べることによってデカブリストたちの伝統的な意義を高く評価している。「神話と伝説は歴史的にはそれを生み出した真実の事件よりもさらに有意義なものである[86]」と。このように、デカブリストたちは後世の人々に残したその伝説的な価値ゆえに多くのロシヤ史家たちによって歴史的に大きな意義を与えられている[87]。ロシヤ史家たちの多くが共有するこうした観点に立つならば、その精力的なデカブリスト・キャンペーンの推進によって革命主義的なデカブリスト「伝説」を創り上げたゲルツェンの歴史的功績にはきわめて大きなものがあったと言わなければならないであろう。すなわち、ゲルツェンは「彼の同時代人や子孫たちのために時には成功し時には失敗した二〇年代のヨーロッパにおけるような軍事的反乱を、ロシヤの諸世代が多かれ少なかれ近い将来においてそのたゆまぬ努力によって実現するであろう革命のプロミスに変えた[88]」ことによって後のロシヤにおける革命運動の展開に少なからぬ影響を与えることになったのである。

しかし、こうしたゲルツェンのロシヤ革命運動史における歴史的な功績とは裏腹に、彼によってなされた革命主義的デカブリスト評価はデカブリスト運動が伴っていたもう一つの重要な側面（＝革命主義的な側面とは本質的に異なった自由主義的な側面）を無視することによって実際のデカブリストたちのイメージを著しく偏ったものにしてしまった。たしかに、ゲルツェン自身のデカブリスト評価には自由主義的なデカブリスト右派の人々に対する積極的な批判はほとんど存在していない。というのも、彼によってなされたデカブリスト評価はあくまでもデカブリストたちの徹底した革命主義的理解から成り立っているのであり、こうした彼の評価において彼らに対する否定的

な評価がほとんど見られないのは至極当然のことであった。しかし、本論においても指摘したように、ゲルツェンのデカブリスト評価にはこの評価がもつその革命主義的性格ゆえにいわゆるデカブリスト右派もしくは初期デカブリスト運動の否定的評価へとつながっていく潜在的可能性が存在していた。彼自身はレーニンや多くのソ連史家たちがそうしたように積極的にデカブリスト右派の人々の政治的限界性について批判しはしなかったけれども、革命主義的デカブリスト理解を基調とする彼のデカブリスト評価の性格そのものがこうしたデカブリスト右派の人々を後にその否定的な評価の方向へと導いていく可能性を多分に伴っていたのである。すなわち、ゲルツェンはデカブリストたちにあまりに革命主義的なイメージを与えてしまったことによって、こうした彼の革命主義的デカブリスト像とは本質的にそぐわない多くのデカブリスト右派の人々を否定的に捉える歴史的評価に大きく道を開くことになってしまったのである。

デカブリスト運動が展開された一九世紀第一四半期は、近代ロシヤ史の中でもきわめて特異な時代であった。というのも、この時代には未来のロシヤが従来通りの専制的な封建農奴制国家にそのまま留まるのか、もしくは西欧的なブルジョア社会へと発展していけるかどうかの一つの大きな歴史的オールターナティヴの可能性が存在していたと考えられるからである。[89] アレクサンドル一世による自由主義的諸改革をめぐる保守勢力と革新勢力との力の攻めぎ合いがこの時代の大きな特徴であった。そうした状況の中で進歩的な多くの青年貴族たちがアレクサンドル一世による自由主義的諸改革の推進に期待を寄せつつ政治的に結集していった。デカブリスト運動がそれである。彼らの多くは当初政府主導の体制内的な改革路線を積極的に支持することによってロシヤ社会を漸進的に西欧的な自由社会へと変革していこうと考えていた。しかし、ナポレオン戦争以後のロシヤの諸状況は急速に反動的な様相を呈していった。こうした状況の中で彼らは次第に政治的に追いつめられ、究極的に革命主義的な改革路線の採用を

迫られていく。そして、そうした彼らの急進主義的な革命路線の終着点がデカブリストの反乱だったと言えるのである。

このように、デカブリスト運動は穏健で自由主義的な革命路線と急進主義的な革命路線という二つの重要な側面を伴っていた。こうしたデカブリスト運動の現実において、ゲルツェンに始まりレーニンを経てペレストロイカ以前のソ連史家たちの評価へと至る革命主義的デカブリスト評価は、あくまでもこの運動の一面的な側面のみを評価することによって、自由主義的なデカブリスト評価の可能性を著しく損なってきたと言えよう。デカブリスト運動を歴史的な事実に即した形でより正しく理解するためにはデカブリストの反乱の背後にあった一〇年に及びデカブリストたちの苦悩と模索の過程を詳細に考察していく必要がある。そうした考察の過程において、われわれはこの運動が如何に穏健な自由主義的改革路線と密接に結びついたものであったかということについて知ることになるであろう。ペレストロイカ以後のロシヤにおいて急速に進められている「歴史の見直し」作業の中で従来の革命主義的デカブリスト評価は今日その根本的な修正を迫られている。そして、そうしたデカブリスト再評価の過程で一つの大きなポイントとなるのがこれまで述べてきたツルゲーネフをはじめとするデカブリスト右派の人々に対する再評価の問題であると言えるだろう。現下のロシヤにおける政治的諸状況との関連で、近代以降のロシヤ史における政治的自由をめぐる諸問題が何よりも問われている今日のロシヤ史学界において、デカブリスト運動における彼らの役割がより積極的に評価されていくであろうことはほぼ確実である。こうした自由主義的デカブリスト評価の復権の動きの中で、これまでソ連の「公式」的なデカブリスト解釈において重要な位置づけを与えられてきたゲルツェンの革命主義的デカブリスト評価も大きな批判の対象になるであろうことは必至である。しかし、そうした批判的作業を経てはじめて歴史的事実にうらうちされたより客観的なデカブリスト評価が可能なものになっていくと言

えるのである。

註の部

(1) 本稿の執筆に当たって全般的に以下の論文を参考にさせていただいた。「ゲルツェンとナロードニーチェストヴォ」、『近代ロシヤ政治思想史』、勝田吉太郎著、一九六一年、創元社。

(2) А. И. Герцен, Собрание Сочинений в тридцати томах, Академия Наук СССР, Том XVI, стр. 171.
以下、А. И. Герцен と略す。

(3) М. В. Нечкина, Движение Декабристов, Том I, 1955, стр. 5-49 を参照。以下、М. В. Нечкина と略す。

(4) デカブリストの反乱に関する最高刑事法廷の判決内容は以下の通りである。

① 審問に呼び出されたもの—五七九名

軍　人　四五六名
市　民　七二名
地主等　五一名

② 審問に呼び出された五七九名のうち

関係者と見なされたもの　二八九名（起訴）
釈放されたもの　二九〇名（不起訴）

③ 関係者と見なされた二八九名のうち

有罪と見なされたもの　一三一名
監督下に別の連隊に移されたもの　一二四名
審問以前又は審問時に死んだもの　二一名

外国に追放されたもの　四名
運命が定かでないもの　九名

④ 有罪とされた一三一名のうち

処刑　五名　農民労働　四名
シベリヤ徒刑　八八名　兵士に降格　一五名
シベリヤ流刑　一八名　シベリヤ居住　一名

（M. B. Нечкина, стр. 392. 以下を参照）

(5) 『過去と思索』、ゲルツェン著、金子幸彦訳、世界文学大系第82巻、筑摩書房、一九六四年、四〇頁。
(6) 同書、三四―三五頁。
(7) 同書、五三頁。
(8) 同書、五三頁。
(9) Michel Cadot, "Herzen et Les Decembristes", in Le 14 Decembre 1825, Collection historique de l'Institut d'Etudes slaves. -XXVII., p. 104. 以下、M. Cadot と略す。
(10) M. Cadot, p. 104.
(11) ロシヤ暦にもとづく日付を記載する場合には（ ）を使用する。（ ）のない場合は原則としてグレゴリー暦にもとづく日付である。なお、訳文の日付については原文通りに記載することにする。
(12) 勝田吉太郎、前掲「ゲルツェンのナロードニーチェストヴォ」、三八七頁。
(13) 『浪漫的亡命者』、E・H・カー著、酒井唯夫訳、筑摩書房、一九七〇年、二八頁。
(14) 勝田吉太郎、前掲「ゲルツェンのナロードニーチェストヴォ」、三九〇頁。
(15) 『過去と思索』、ゲルツェン著、金子幸彦訳、世界文学大系第83巻、一九六六年、七六頁。以下、『過去と思索』IIと略す。

(16) ゲルツェンのメシチャンストヴォ論を理解する上で、以下の書物から多くの示唆を得た。『ロシヤインテリゲンツィヤ史』、松原広志著、ミネルヴァ書房、一九八九年。

(17) 『過去と思索』II、一四頁。

(18) 一八五七年一一月一日付の『コーロコル』には、『И・Д・ヤクーシキンが死んだ』という短い記事が掲載されている。この記事の傍註において初めてゲルツェンは公に「デカブリスト」という名称を用いた。その内容は以下の通りである。「陛下はあたかもドルゴルーコフやチマーシェフがシベリヤから帰還したデカブリストたちを抑圧していることを知らないかのように語られている。……」(Колокол, Том I, Академия Наук СССР, 1962, Москва, стр. 35.)

(19) См., М. К. Азадовский, О происхождении Слова 《Декабрист》, в кн.: Сибирь и Декабристы, Том II, Восточно-Сибирское Книжное Издательство, 1981, Иркутск, стр. 177-80.

(20) См., М. В. Нечкина, Когда и Где возникло 《Декабристов》, в кн.: Сибирь и Декабристы, Том I, Восточно-Сибирское Издательство, 1978, Иркутск. стр. 7-20. なお、C. A. Peйcep や C. B. Житомирская といった研究者たちも Нечкина と同じくこの名称が一九世紀第二四半期のシベリヤにおいて初めて使用されたという論旨の論文を発表している。

(21) ゲルツェンのデカブリスト・キャンペーンは『戦争と平和』を構想中のトルストイに重要な影響を与えていたものと考えられる。ロシヤにおける「大改革」時代の本格的な到来を告げる農奴解放令が発布されて間もない一八六一年三月、トルストイは当時ロンドンにいたゲルツェンに次のような手紙を書いている。

「4カ月まえから長編の構想を練っています。もどってきたデカブリストが主人公になるはずです。……わたしのデカブリストは熱情家で、神秘主義者で、キリスト教徒で、一八五六年に妻子とともにロシヤにもどり、きびしい、やや理想主義的な目をロシヤに向けることになるはずです」(『戦争と平和』、トルストイ著、工藤精一郎訳、新潮社、一九八一年、第四巻、五三一頁)。この手紙の中でトルストイが語っている「長編」とは、後に不朽の名作として多くの読者を魅了することになる『戦争と平和』のことを指していた。この手紙の内容から、トルストイが当初アレクサンドル二世の即位に伴う大赦によってシベリヤから戻ってき

た老デカブリストを題材にした長編小説を書こうと考えていたことがはっきりと分る。しかし、トルストイの興味の対象は構想を重ねるうちにやがてこの老デカブリストをデカブリスト運動というロシヤの社会変革運動へと駆り立てていく決定的な契機となった彼の青年時代へと移っていった。こうして、最終的に出来上がった作品が対ナポレオン戦争時代のロシヤを主要な舞台とする「戦争と平和」だったのである。その意味でこの作品はアレクサンドル一世時代のロシヤにおける進歩的な青年貴族たちがどのような体験を通してデカブリスト運動へと参加していったのかを克明に描いた「デカブリスト前史」としての意味をもっていると言えるのである。

(22) Н. Я. Эйдельман, Тайные Корреспонденты «Полярной Звезды», Мысль, 1966, Москва, стр. 3.　以下、Н. Я. Эйдельман と略す。

(23) ゲルツェンは一八五五年七月二五（一三）日、即ち、五人のデカブリストたちが処刑された日に『北極星』誌の第一巻を出そうと努めた。しかし、この計画は実現せず、それは八月になってようやく発刊された。

(24) См, Н. Я. Эйдельман, стр. 18.

(25) V・リントンはイギリスの彫刻家・文学者であり、チャーティスト運動の参加者であった。彼はゲルツェンの依頼にしたがって五人のデカブリストたちのプロフィールを作成した。

(26) См, Н. Я. Эйдельман, стр. 18.

(27) デカブリストの反乱の直前に発刊されていたこの雑誌には、未だ当時の進歩的貴族たちのオプティミスティックな期待が溢れていた。この雑誌の投稿者には、プーシキンをはじめとしてグリボエードフ、ジュコーフスキー、キュヘリベッケルといった当時の一流の文学者たちがいた。

(28) Н. Я. Эйдельман, стр. 13.

(29) Там же, стр. 54.

(30) И・Д・ヤクーシキンの次男であったエヴゲーニーは一八五三年にシベリヤに赴き、父をはじめИ・И・プーシキン、М・И・ムラヴィヨフ＝アポストル、Е・П・オボレンスキーといったデカブリストたちと対面し、彼らの手記の出版に尽力した。『北極

星」誌の通信員としての彼の役割は極めて大きく、彼の存在なしにはデカブリストたちの手記の原稿は半分も集まらなかったであろうと言われている（См., Н. Я. Эйдельман, стр. 235-236）。

(31) E・H・カー、前掲『浪漫的亡命者』、二〇二頁。

(32) この勅令は一八五六年八月二六日に出されたアレクサンドル二世の戴冠時のマニフェストの構成部分として発せられた（См., Государственные Преступления въ России въ XIX въкъ, Том I, 1906, С-Петербургъ, стр. 109-111. 以下 Г. П. Р. と省略する）。なお、八月二六日はロシヤ暦にしたがった日付である。

(33) Г. П. Р., стр. 109.

(34) См., Л. А. Сокольский, Возвращение Декабристов из Сибирской ссылки, в кн.: Декабристы в Москве, Москва, 1963, стр. 225-229.

(35) この書物には邦訳が存在する。『秘史デカブリストの乱』、モデスト=コルフ著、山本俊郎訳、恒文社、一九八二年。コルフのデカブリスト評価の理解に当たっては主としてこの訳文を参考にした。

(36) 同書、一六二頁。

(37) А. И. Герцен, Том XIII, стр. 67.

(38) Л. Г. Бескровный, Проблемы Историографии, Движения Декабристов, в кн.: Проблемы Истории Русского Общественного Движения и Исторической Науки, Наука, Москва, 1981, стр. 254.

(39) А. И. Герцен, Том XIV, стр. 126.

(40) 一八六二年九月一日付の『コーロコル』誌の記事において、彼は「デカブリストの手記」の出版計画について次のように述べている。

「われわれは個々の分冊によって『手記』を出版し、И・И・ヤクーシキンとトルベツコーイ公の『手記』から始めることを提案する。その後に、オボレンスキー公、バサルギン、シテインゲリ、リュブリンスキー、H・ベスツージェフの『手記』、さらにプーシチンの一二月十四日について、……『審問委員会のリスト』、ルーニンの結論文や種々の書簡が続く」（А. И. Герцен,

Том XIV, стр. 237.)。

(41) См., А. И. Герцен, Том XIV, стр. 432-433.

(42) Там же, Том XIV, стр. 237.

(43) 一八六二年にロンドンにおいて公刊された『И・Д・ヤクーシキンの手記』にもとづいて書かれている。ゲルツェンはこの論文の最後でヤクーシキンの言葉を引用してデカブリストたちの侮辱的な思い出(主としてコルフの書物を指す)のために復讐を誓っている(А. И. Герцен, Том XX, стр. 260.)。

(44) 晩年のゲルツェンはデカブリストたちと結びついた自らの少年時代の思い出を繰り返し繰り返し回想している。以下に掲げる『未来の友への第四書簡』(一八六四年)の一節にはこの時期の彼を捕らえていたメランコリッシュな雰囲気が如実に表われていると言えよう。

「十四歳の少年であった私は彼らのことを嘆いた。そして、私は彼らの破滅に復讐することを誓った。遍歴と輝く星々の時代、涙と輝かしい笑いの時代は終わった。…われわれの最年長者たちは生き残ったデカブリストたちである。われわれはまさに出立しようとする連隊についていく街頭の少年たちのように行進を続け、多くの人々の中で成長した」(А. И. Герцен, Том XVII, стр. 88-89.)。

(45) M. Cadot, p. 116.

(46) А. И. Герцен, Том XVI, стр. 171.

(47) ソ連のデカブリスト研究者の多くがヤクーシンをデカブリスト運動における急進派の流れの中で捉えているのも本文に記載したようなヤクーシキンの確固たる態度と密接に結びついている。しかし、ヤクーシキンにはそうした急進主義的な革命主義者としての側面とともに漸進主義的な社会変革者としての側面が強く存在していた。以下に記載する自身の論文はこうしたヤクーシキンの漸進主義的な社会変革者としての側面に比重をおいて書かれたものである。「И・Д・ヤクーシキンとデカブリスト運動」(『法学論叢』、一二七巻三・四号、一九九〇年六・七月)。

(48) ルーニンにはその独特な個性ゆえに様々な政治的逸話が存在している。そうした逸話が集まっていわゆるルーニン伝説と呼び得るものが創り上げられていった。ソ連のデカブリスト史家C・B・オークニはシベリヤ流刑後も専制政府の迫害と闘い続けたルーニンの著作をゲルツェンがすでに革命運動という名のリレーから離脱した人々によって書かれたメモワールとしてではなく、現役の闘志のスローガンとして取り扱っていることを指摘している（См., С. Б. Окунь, Декабрист М. С. Лунин, Издательство Ленинградского Университета, 1985, стр. 274.)。

(49) デカブリストたちのほとんどが当初アレクサンドル一世の自由主義的諸改革に大きな期待を抱いていた。こうした期待は対ナポレオン戦争後に成立した反動的なアラクチェーエフ体制下の時代には幻滅へと変わっていくことになるけれども、彼らの多くはデカブリストの反乱の直前まで政府による上からの改革に淡い期待を待ち続けていたのである。こうした事情はペーステリやヤクーシキンといったデカブリストたちの中でも特に政府に対して厳しい目を向けた人々においてもけっして例外ではなかったのである。

(50) 本文でも述べたように、ゲルツェンのデカブリスト・キャンペーンには政治的プロパガンダの観点のみでは説明し得ないものが存在している。後にレーニンがあくまでも政治的現実主義の立場からデカブリストたちを自らの運動との関わりにおいて冷徹に評価していったのに対して、ゲルツェンのデカブリスト評価にはそうした政治的現実主義のみでは説明し得ない多分に理想主義的な性格が顕著に現れている。こうした彼のデカブリストたちに対する政治的な思い入れは、やはり彼の少年時代における個人的な体験と深く結びついたものであると思われる。

(51) M. Cadot, p. 109.

(52) 『ロシヤにおける革命思想の発達について』、ゲルツェン著、金子幸彦訳、岩波書店、一九七五年一一八頁。

(53) 当時、イタリアはゲルツェンにとってロシヤと同じく特別な意味をもっていた。というのも、ゲルツェンの時代のイタリア社会には彼がかくも忌み嫌ったブルジョア的メシチャンストヴォが大きな社会現象とはなっていなかったからである。素朴な気質を未だ残しているイタリアの民衆はゲルツェンにロシヤの民衆に対してと同じく大きな期待を与えたのである。『過去と思索』の中

でのイタリア賛歌はゲルツェンのこうした意識の下に書かれたものである。

(54) 『過去と思索』II、四〇頁。

(55) このピザカーネの死は後にルイージ・メンカンティーニによって作られた戯曲『サプリの落穂拾いの乙女』を通してイタリアの国民的な「伝説」になっていった。

(56) 同書、四〇頁。

(57) プルードンやバクーニンの「伝説」もしくは「神話」をめぐる見解は後にソレルによってさらに徹底した形で主張されていくことになる。ソレルの『暴力論』におけるいわゆる「神話の理論」がそれである。

(58) Cf., M. Cadot, p. 109.

(59) 一八五五年の『北極星』誌の発刊に当たって誰よりもはやくこの企画に賛意を示した人々は、ミシュレ、マッチィーニ、プルードン、ユゴーといった西欧のデモクラットたちであった（См., Н. Я. Эйдельман, стр. 18.）。

(60) 最初は『民主主義の黄金伝説』（一八五一年）と題されていたが後に増補して『北方の民主主義伝説』と改題された。ロシヤの殉教者と題されたその中心部分はデカブリストたちのメモワールを含んでおり、終わりの部分にはミシュレによるゲルツェンの『ロシヤにおける革命思想の発達について』の講釈が加えられている（M. Cadot, p. 103.）。

(61) А. И. Герцен, том XIII, стр. 126.

(62) M. B. Нечкина, стр. 16. ネーチキナは革命前のポクロフスキーのデカブリストたちに対する態度を次のように批判的に述べている。

「過去の革命ロシヤに対する態度がポクロフスキーによる理解の最たる特徴であった。ポクロフスキーは『伝説』におけるデカブリストたちの革命主義的意義を理解しながら、『デカブリストについての伝説』を暴露することを自己の目的として提起した」（M. B. Нечкина, стр. 31-32.）。

(63) ポクロフスキーはボリシェヴィキの立場からブルジョア的な性格を帯びたデカブリストたちの運動を否定的観点にたって評価

した。こうした彼のデカブリスト評価を象徴的に物語っているのがデカブリストの反乱から革命主義的な意味合いを完全に取り去ってしまったことである。彼によれば、デカブリストたちが元老院広場において革命的行動をとることができなかったのは民衆を恐れていたからであった（См. М. Н. Покровский, Избранные Произведения, Том II, Мысль, 1965, Москва, стр. 267.）。こうしたポクロフスキーのデカブリスト評価はその評価の意味合いが全く異なるけれどもデカブリストたちの運動をブルジョアジーたちのそれと考え、この運動の革命主義的理解を否定的に見る「自由主義的デカブリスト」評価に一脈を通じていると言えよう。

(64) А. И. Герцен, Том XIII, стр. 140.

(65) Там же, стр. 139.

(66) Там же.

(67) Там же стр. 144.

(68) 臨時独裁をめぐって北方結社の代表であったポッジオとペーステリとの論争において、ゲルツェンは「ペーステリが全く正しい」（А. И. Герцен, Том X III, стр. 133.）と述べてペーステリ全面的に支持している。

(69) П. Ф. Николаров, Революционная Идеология Декабристов, Ленинград, 1976, стр. 186-187.

(70) 『ロシヤおよびロシヤ人』は全三巻からなり、そのうち、デカブリストの反乱の裁判に対するツルゲーネフの抗議をその主な内容とする第一巻と農奴解放以前のロシヤの政治、経済、社会機構を扱った第二巻が邦訳されている。第一巻＝『亡命者の手記』、山本俊朗訳、恒文者、一九七九年。第二巻＝『ロシヤおよびロシヤ人』、山本俊朗訳、広文堂書店、一九六八年。

(71) M. Cadot, p. 116.

(72) 一八二四年まで秘密結社の積極的なナンバーの一人であったツルゲーネフは、財政や農奴制に関わる諸問題に精通しており、亡命者の長老としてゲルツェンに大きな感銘を与えた。しかし、ゲルツェンは彼が二〇年間も自由主義思想で満足していることで、また一八二四年以降はロシヤについて何も知ってはいないことによって彼を非難した（M. Cadot, p. 108.）。ツルゲーネフに対するゲルツェンのこうした否定的な態度はアレクサンドル二世による農奴解放令の発布を契機として一時期肯定的なそれへと変わ

っていく。そうした変化の背景には、アレクサンドル二世による諸改革に対するゲルツェンの期待があったからであった。この一時期、ゲルツェンはツルゲーネフに対して次のような賛辞を送っているが全体的に見て彼のツルゲーネフに対する評価はかなり厳しいものであったと言える。

「三〇年来、そのエネルギーはなくならず、ロシヤのためにその愛は弱まることはなかった。……ペーステリ、ヤクーシキン、フォンヴィージンなどを生みだした驚くべき世代、当然のごとくＨ・Ｉツルゲーネフの世代。ヤクーシキンは若々しい心をもってシベリヤから戻ってきた。ツルゲーネフは二〇年来の若々しい信念をもって一八六〇年のパリにおいて執筆に励んでいる」(А. И. Герцен, Том X V, стр. 328.)。

(73) この時期における自由主義的デカブリスト評価の代表的研究者としては、Ａ・Ｈ・プイピンとＢ・Ｏ・クリュチェフスキーが挙げられる。両者に共通していることは、革命主義的デカブリスト理解の否定とスペランスキーに象徴されるアレクサンドル一世時代の政府部内における改革論者たちと彼らとの思想的同一性の強調といった観点である。彼らのデカブリスト評価は漸進的で穏健な改革路線を基調とする初期デカブリスト運動との関連において興味深いものであると言えよう。

(74) ロシヤ革命以前のデカブリスト研究の第一人者と言われたＢ・И・セメーフスキーがナロードニキ主義的立場にたつ代表的研究者であると考えられる。彼のデカブリスト評価の特徴はデカブリストたちをデクラッセ・インテリゲンツィヤとして捉えることによって彼らに理想主義的な社会変革者としてのイメージを与えていることである。農業問題を特に重視するセメーフスキーはペーステリの農業綱領を最も高く評価する。しかし、それと同時に彼の評価には政治的観点からは自由主義的なデカブリスト評価にも相通じるデカブリスト像が存在していると考えられる (См., В. И. Семевский, Политические и Общественные Идеи Декабристов, Типография Первой Спб. Трудовой Артели, 1909, С-Петербургъ.)。こうしたセメーフスキーのデカブリスト理解をソ連のデカブリスト史家たちは一般にあまりに理想主義的な評価であると批判的に捉えている。

(75) В. И. Ленин, Доклад о революции 1905 года, Полн. собр. сон., Том 30, стр. 315.

(76) Памяти Герцена, Там же, Том 21.

(77) Роль сословий и классов в освободительном движении, Там же, Том 23.

(78) Из прошлого рабочей печати в россии, Там же, Том 25.

(79) Памяти Герцена, Там же, Том 21, стр. 14.

(80) В. А. Фёдров, В. И. Ленин о декабристах, в кн.: Декабристы и сибирь, Наука, Новосибирск, 1977, стр. 16.

(81) 一九三六年一月二六日、ソ連共産党中央委員会およびソヴィエト人民委員会議によってポクロフスキー批判が展開される。このポクロフスキー批判によってそれまでソ連史学界において主流となっていた非革命主義的デカブリスト理解はレーニンのデカブリスト評価にもとづく革命主義的デカブリスト理解に道を譲ることになる。ポクロフスキー批判後にソ連史学界の代表的デカブリスト史家となったM・B・ネーチキナはこの時の状況を次のように述べている。

「ソヴィエトデカブリスト研究の新たな段階は、第一にレーニンによって提起されたあらゆる種類の研究課題に対する深みのある科学的関心によって特徴づけられている。ソヴィエトのデカブリスト研究者たちは、老いも若きも、注意深くこれらの課題を考察し、……運動のレーニン的理解に従っている。何よりも、革命運動の代表者としてのデカブリスト理解というものがしっかりと再建されようとしている」(М. В. Нечкина, стр. 36.)。

(82) М. В. Нечкина, Декабристы, Наука, Москва, 1982, стр. 177.

(83) Там же, стр. 179.

(84) С. С. Лавда, Дух Революционных Преобразований, Мысль, Москва, 1975, стр. 14.

(85) 『デカブリストの反乱』A・G・マズーア著、武藤潔・山内正樹共訳、光和堂、一九八三年、二九八頁。

(86) Marc Raeff, The Decembrist movement, Prentice-hall, New Jersy, 1966, p. 28.

(87) イタリアのロシヤ・ナロードニキ研究の第一人者であるフランコ・ベンツーリは、その主著『革命の起源』の第一章においてゲルツェンとの関連でデカブリストの反乱について次のように述べている。

「一八二五年一二月一四日の反乱とその鎮圧は、一八世紀の最も高貴な精神が吹き込まれた自由でかつ啓蒙的なロシヤへのあこ

がれを結晶化していた。そうした精神の最終的な爆発がデカブリストの反乱であった。反乱の鎮圧はそのような営為を停止させてしまった。しかし、同時に、それらを今のところ果たされてはいないが近い将来において必ず果たされるであろう約束という伝説に変えた」(Franco Venturi, Roots of Revolution, translated from the Italian by Francis Haskell, the University of Chicago Press, 1983, p. 2.)。

(88) M. Cadot, p. 103.

(89) 歴史的オールターナティヴ論の立場からアレクサンドル一世時代のロシヤにおける歴史的可能性の問題を「専制」と「改革」との関係を中心に論じた以下の著作は、ロシアにおける今後のデカブリスト研究の方向性を考えていく上で興味深い書物であると言えるであろう。С. М. Мироненко, Самодержавие и Реформы, Москва, Наука, 1989.

ミロネンコによれば、一八一五年から二五年までのロシヤは、「専制と改革」という文脈において例外的な意味を有する時代であった。この時期、保守派と改革派の間には激しい政治的攻防が繰り返され、ロシヤの未来はひとえにこうした二つの政治勢力の衝突の帰結にかかっていた。結果的にこの時代にはいかなる大規模な変革ももたらされなかった。「あらゆる計画が計画のままに、あらゆる草案が草案のままに終わった」。しかし、歴史において未発達の改革は重要な意味を持っている。というのも、一八五〇年代末から六〇年代初めのロシヤにおいて顕著なものになっていく一連の矛盾はまさにこの時代に芽生えはじめていたからである。このように自らの論を進めてきたミロネンコは、それ故に新たな視点でこの時代を見ていく必要があるのだと主張する。すなわち、この時代には実際のロシヤ史とは異なる別のロシヤ史を可能なものにする選択肢が存在していたのだという歴史的オールターナティヴ論の視点がそれである。